

表現よみとは何か

(第4章)

——朗読で楽しむ文学の世界——

渡辺 知明

第一部 黙読・音読・表現よみ

第4章 表現よみのすすめ

1 表現よみの楽しさ

(1) カラオケと表現よみ

わたしはこれまで二十年近く表現よみの勉強をつづけてきました。どうして、そんなにつづいているのか考えてみれば、よむことが楽しいからです。小説を黙読でよむのとはちがった実感をもって味わえます。よんでいる作品がまるで自分の書いた文章のように感じられます。よい文章で書かれた小説は声を出すことが気持ちよいのです。

だれにも分かりやすいたとえでいうと、表現よみには「カラオケ」に似た楽しさがあります。第一に、だれでも気軽にはじめられることです。文字がよめて声が出さえすればだれにでもできます。作品を見ながらよめばよいのですから、演劇や語りのように苦勞して文章を暗記する必要もありません。それに「カラオケ」とちがって曲がありませんから「音痴だから」などと恐れることもありません。

第二に、聞き手よりもよみ手の方が楽しいこともカラオケに似ています。ある程度よめるようになるのと病みつきになって、ほかの人に聞いてもらいたくなくなります。機会があるごとに人まえてよむという楽しみが生まれます。また、話下手だった人でも声を出すことが楽になって、話をすることも苦痛でなくなります。なかには、消極的な性格が積極的に変わった人さえいます。

また、表現よみをしていると「耳が肥える」ために人の声や話し方の表現に敏感になります。すると、演劇やテレビドラマなどの下手なセリフや心のこもらない話し方がすぐわかってしまいます。下手なセリフがしらしらしく聞こえてきます。それだけ人間の声の真実が聞き分けられるようになって、本物の演技とセリフの真実性がわかるようになるのです。

わたし自身、表現よみをしてから日常生活での人の声や話し方に敏感になりました。話し相手の話し方の特徴や声の表現の深さもわかってきました。人の話し方から自分の話し方を学べるようにもなりました。発表会でも、ほかの人のよみを聞きながら、よみそのものを楽しめます。とにかく、表現よみもカラオケも阿波踊りと同じで、「同じアホなら、踊らにやそんな……」というものです。

(2) 実行が実力を生む

表現よみは理屈が分かれればできるというものではありません。実行が大切です。どんなに説明を聞いても、どんなに理屈がわかってても、自分で実行してはじめて効果がわかるものです。

わたしは一九七五年に日本コトバの会に入会しました。目的は文章を書く力をつけることでしたが会の講師から表現よみをすすめられました。

「表現よみは文章の勉強にも役立ちますから、ぜひおやりなさい。三年間つづけければ、ある程度のよみはできるようになります」

三年もかかるのかとおどろきました。ほかの人がよむのを聞いていると、その程度のよみならすぐにできそうな気がしました。ところが、よんでみて驚きました。第一のショックはテープレコーダに入れた自分の声です。再生された声は予想した声とはまるでちがうのです。とても自分の声とは思えません。テープの声はカン高くて、クセだらけのよみ方も聞くにたえないものでした。

そんな感想を話すと、講師は「それだけ自分のよみがわかるのなら上達は早いでしょう」といつてくれました。そのコトバに励まされて表現よみの勉強を始めたのですが、一応のよみに達するまでにはやはり三年が必要でした。

それから何人もの人たちのよみを聞いてきましたが、たしかに、だれでも三年つづけなければ必ずある程度のよみには達するようになります。むずかしいのはそれから先のことです。「コトバは一生かかってみかくもの」というように表現よみは奥の深いものです。さらに上達するためには文学の理論やコトバの勉強も必要になります。それでも、自分の能力を高める楽しい勉強であることに変わりはありません。

文学作品の味わいという点では、表現よみにはふしぎな魅力があります。どんなに深く黙読したつもり作品でも、表現よみをしてみると、そのたびにプラス・アルファの深まりが生まれます。すっかり内容を理解しているつもりでよんでも、一回ごとに思いもしない世界が心に浮かぶのです。また、練習で何度もよんだ作品でも、よみで新たな理解を発見することもあります。毎回のように同じ芝居を演じる俳優から「演ずるたびに、新鮮で一日一日が新たな経験です」と聞いたことがあります。表現よみでも同じような経験があるのです。

2 一日五分よめば力がつく

表現よみは短時間でも毎日つづけさえすれば必ず効果が上がります。表現よみは非常に緊張感と集中力を要求しますから、一〇分間よむとアタマの中がクタクタになるほどです。「棒よみ」をしているときは疲れずにいくらでもよめますが、表現よみでは作品の内容理解に神経を

集中してよむので本当に疲れます。その疲れは精神的なものです。よみ終わるとじつにすがすがしい気分です。

ところが、初心者には「疲れる」という意味がなかなかつかめないようです。はじめは張りきって「きのうは三〇分よんだ」などといいます。そんなよみかたは発声や発音の基礎練習にはなるでしょうが、表現よみとしては意味がありません。五分間よんでも疲れを感じないのは内容に意識が集中してない証拠です。初心者は作品のどこに意識を集中してよめばよいか分からないから疲れないのです。表現よみをして疲れるためには疲れるだけの能力が必要なのです。何か月か練習して疲れを感じるようになったときには、それだけよみが進歩していると考えるよいのです。

そのような能力が育つまで、第一目標として「一日五分間で一ヵ月」とっておきましょう。文庫本の三ページをゆつくりよむと五分くらいですから、毎日その程度の努力をしてください。いつか、声が出るといふようになります。よみの楽しさもわかってきます。

(1) 表現よみの効果

表現よみは楽しいだけのものではありません。言語能力を向上させる基本的な学習方法です。日本コトバの会では、もっとも入門しやすいコトバ学習として、すべての会員に義務づけてい

ます。

表現よみの利点と意義については「表現よみの七つのトク」がまとめられています（大久保忠利著『人間教師の文学教育』65ページ）。第一章では項目だけあげましたので、ここで内容を紹介しましょう。カッコ内に、わたしのコメントを加えました。

- 1 **アタマがよくなる**——よむ⇕音声表現によって、言語中枢にフル回転のシゲキが与えられる。（もう一度、第1章「コトバの網の図」を参照してください）
- 2 **音声表現力が身につく**——発音がよくなり・音読や発音が正しく美しくなる・文章上達——これが直接の効用。（よみの基礎条件として正しい発音があります）
○**理解語イ⇕表現語イ**——書かれた語句をその場で表現に転化することにより、理解と同時に表現語句として使用することになる。また、表現することで理解もできる。（知らず知らずに語イが豊富になり、文章を書くときにも自然にコトバが浮かんできます。会話をしている作品の一節がつかい口から出ることもあります）
- 3 **文章（文学文・理論文とも）の内容がよくアタマに入ってくるようになる**——一語・一句をキチンとよむ訓練から生ずる。（時間の量はかかりますが、よみの質は深まります）
- 4 **内耳が澄んでくるから、人の話がよく聞け・その本心が鋭く感知できる**——コトバの音が磨かれる。（耳が肥えてくるので、人のコトバのウソ・ホントまで直感的に見ぬくことができます）

ができます）

- 5 **話すときには聞き手の反応を推測し、書くときにはよみ手の反応を予測できるようになる**——例えば、作中の三人の人物の対話をよむことで、一人の話しているとき、他の二人の聞き手の心が同時に意識に浮かぶことになる。（コトバによる想像力が日常生活に生かされ「気ばたらき」になり、人間関係がスムーズになります）
- 6 **感情を文学的・美的にコントロールし言語表現できるようになる**——小説の文章を、作者の意識をくぐりぬけて表現よみするから、作中人物の言語⇕心理にも敏感になる。それが生活の中で自分の感情をコントロールするのに役立つ。（よみの行為そのものが集中力を育てるとともに、精神統一の効果をもつのです）
- 7 **人生が楽しくなる**——自分のコトバが生きてくれば、内言での認識・思考がらくらくと進められるから、それだけほんとの意味で人生を楽しく、たくましく送れるようになる。（コトバの力が生きる力と生きる自信を育ててくれます）

3 準備するもの

① 一冊の文庫本とエンピッド

表現よみほどお金のかからない言語能力向上の効果的な学習方法はありません。最低限必要なのは、一冊の小説と記号づけのためのエンピツです。

小説は値段の安い文庫本から選ぶとよいでしょう。近ごろは活字もずいぶん大きめに印刷されています。古典といえるすぐれた文学作品も収録されていますし、どんなに記号づけして汚しても惜しくはありません。一日に五分で文庫本三二ページをよむとして三百ページの本なら三カ月は使えますから安上がりです。エンピツは2Bくらいの軟らかいものにするのと紙を破かずにすべりよく書けます。そのほか、赤青が半分の色エンピツを使うと、よみの注意点などを色分けしてつけられるので便利です。

作品を選ぶには、いくつかの注意点があります。第一に、好きな作家の作品を選ぶことです。自分の好きな小説家の作品なら内容にも興味を持てるので、よむ勉強も長つづきするでしょう。第二に、できるだけ文学的価値の高い作品を選ぶことです。近ごろの新聞に連載された小説のように、会話ばかり多いものは避けてください。表現よみは地の文のよみに工夫をするものです。会話ばかりですと、舞台劇の練習のようになってしまいます。一見してすらすらよめそうな作品よりも、ある程度は理解の努力の必要なのがよいでしょう。多少はよみにくくても、質の高い文学作品は内容的に奥が深いので、いつまでもあきずによみつづけられます。質の低い作品は大げさな調子をつけたくなりますし、しだいによむに耐えなくなります。

とくに好きな作家はいない人は、すでに名作と認められている作品を選ぶ方が無難です。以前に一度よんで感動の深かった作品をとりあげるのもよいでしょう。ストーリーをよく覚えている作品でも、表現よみにかけてみると、作品の細部が見えてきますから、知らずによんでいたことに気づいたり、その部分に自分がなぜ感動したのかという発見も生まれます。

(2) テープレコーダの利用

少しお金に余裕がある方はテープレコーダを用意してください。テープレコーダは声の鏡です。まず自分の声とよみ方を知るために、毎日五分間よんで五分間は自分の声を聞いてください。自分の声とよみの調子を知るとは、よみの上達の第一歩です。

たいていの人が、はじめてテープレコーダで自分の声を聞いたときにはショックを受けるものです。「なんて、ひどい声なんだ!」と思わず叫ぶ人もいます。しかし、考えてみれば、本人はその声を知らなかったからよいものの、周囲の人たちはずっと「ひどい声」を聞かされていたことになりません。

「ひどさ」は声ばかりでなく、よみ方にもあります。よみにはその人の日ごろの話し方が出ますから、クセのある人の日常の話し方も同じようなクセがあります。

テープレコーダで聞いた自分の声を意識すると、その日から自分の話しぶりに注意ができます。毎日の話し方も変わります。毎回のよみを必ずテープレコーダに入れる習慣をつけて、あ

とで自分で必ず聞き返すようにします。その日に聞き返すより、翌日の練習前の方が感情的にならず冷静に聞けます。その日の練習前に前回のよみを聞いてから録音をはじめると、いま聞いたばかりの自分のよみを批評的に意識してよめます。

また、録音するときに、両方の耳に録音モニター用のイヤホンやヘッドホンをつけると、自分の声をより明確に意識できます。自分の声だけが周囲の音から切りはなされて鮮明に聞こえます。ちよつとした息づかいや間のとり方まで、驚くほど明瞭に聞こえます。テープレコーダがなくてモニターできないときは、両方の耳を指でふさいでよんでみてください。似たような効果があります。

ただし、テープレコーダは「聞き手」を意識せずによみの練習のできるいい道具ですが欠点もあります。最近のテープレコーダは性能がよいので、小さい声で録音してもよく音を拾います。ひとり深夜にテープレコーダ相手に練習していると、習慣的に声が小さくなってしまいます。録音がひそひそ声やぼそぼそ声になりがちです。テープレコーダは声を入れるのが目的ではなく、客観的に自分の声を聞くための補助的な道具です。目標にするのは自分のナマの声の表現力を高めることです。

4 練習の方法とコツ

(1) 個人練習の方法

個人練習の基本は自分のよみをテープレコーダに入れて聞くことです。はじめは基本的な記号づけをしながらよみます。「**、**」「**、**」以外で切るべきところの間の記号と、「**、**」「**、**」でもつなげてよむ記号だけはつけましょう。よみが途中で途切れてもかまいません。ひとりで読書するつもりで印をつけながら表現よみすればよいのです。

テープレコーダに録音するときは、下よみの段階で記号づけをしてから録音します。よんでみて間がおかしければ、もう一度、ちがう間のとりかたでよんでみます。テープレコーダを意識しすぎる人は、練習中に回しっぱなしで録音するとリラックスできません。

①**自分の理解のためによむ**……個人練習で重要なのは「自分自身が作品の内容を理解できる速さでよむ」ことです。学校で先生に指名されたときのようにペラペラよむのでは、理解がよみの速さについてゆけません。むしろ、一語一句をかみしめるように、ゆつくりとよむべきです。はじめはよみ方よりも作品の内容の理解に意識を集中します。発音・発声・アクセントなどの基本的な問題点は、テープレコーダで再生したときに反省して工夫すればよいのです。

②**ゆつくりよみ・はやくよみ**……個人で練習をするときは、文章のテンポをつかむのがむずかしいものです。そんなときは、テンポをさぐるためのよみ方が必要です。まず、はじめはできるだけ、はやくよんでみます。注意するのは、単語ごとの発音や内容の概略をつかむことだ

けです。そのつぎは、逆にこんな遅くてよいのかと思うくらいゆっくりよんでみます。その両方を交互にくり返すことで、しだいに作品にもっともふさわしいテンポがつかめます。

③感情変化のよみ……ラジオでこんな番組がありました。聴取者からのお便りのハガキを音楽に合わせてよむときに、背景に流れる音楽が次つぎに変化します。あるときは妖怪でも出そうな音楽、つぎはムード音楽、つぎは行進曲という具合です。それに合わせてディスクジョッキーがよみ方を変えるのです。おもしろいことに、音楽に合わせて自然に声の調子も変化しました。それが見事でした。これを表現よみの練習にとり入れるのです。同じ文章を「悲しい思い」「怒りの思い」「喜びの思い」と設定を変えてよむ訓練をします。これは感情表現のテクニックの訓練として役に立ちます。ただし、このような技術はよみの本質ではなく、あくまで練習の方法です。

(2) グループ練習の方法

しばらく、ひとりでよんでいると、はたして自分のよみか悪いのか疑問がわいてきます。そのときには、何人かでグループを作って共同学習をするとよいでしょう。講師がいなくても、ある段階までは共同で学習することも可能です。

ここでは、日本コトバの会・表現よみの会の「共同助言」の方法をご紹介します。この方法

は、参加者が一〇人以下のときに向いています。

参加者一人の所要時間は、①録音（1分）、②録音の再生（2分）③本人の感想（1分）、④前の人の助言（1分）、⑤話し合い（5分）となります。およそ一〇分かかりますから、一人が参加すると、録音時間や休憩時間を入れて二時間近くかかります。

グループ学習の場合、テキストは共通のものにします。本来、表現よみは一人一人のよみに向く作品を選ぶものですが、せっかくグループで学習するので、同じ作品をよむ利点を生かしましょう。よみ手同士がお互いのよみを比較できることが基本的な利点です。共通の作品を選んだときには、あえて一人一人が同じ部分をよみます。自分がよんだ部分を他の人がよむのをきくと「自分ならこうよむ」という考えが浮かびます。そして、他の人へよみの批評が自分自身のよみの創造となります。一語一句のよみ方のちがいの比較から、お互いが成長できます。

テキストはあらかじめ少しずつ一人一人分担任しておきます。あまり長くよんでも疲れますから、文庫本ならせいぜい五、六行です。毎月例会をもつ場合は、一か月前に分担任を決めておくと、その間に各自練習をしてテープに録音できます。それを例会のときに持参すると録音時間が省略できます。

例会でよみの分担任を決める場合は、録音の前に五分か一〇分ほど下よみの時間が必要になります。各自その時間を利用して、記号づけをしながら作品内容の下よみをします。

①録音——よみの基本は「聞き手ゼロ」ですが、人前のよみにも慣れるために、テープレコーダは前方の正面の席に配置して、よみ手は聞き手の方を向いて録音します。はじめのうちは、どうしても聞き手が気になってしまうので、緊張したり上がったりしますが、何度か続けるうちに内容に集中してよめるようになります。

よみ手は、まずはじめに「○○です」と自分の名を言ってからよみ始めます。途中でまちがったら、よみなおせばよいのです。アタマで内容を追えなくなったら、テンポを落としてよんでもかまいません。大切なのは「自分が内容を理解してよんでいる」という意識です。

②テープおこし——全員の録音が終了したら、一人分ずつテープをおこします。司会者とテープ係で会の進行をしますが、司会者がテープ再生の係を兼ねると進行しやすいでしょう。司会者は「では、○○さんのテープをおこします」といってテープを再生します。テープをおこさずナマのよみについて助言すると時間の節約になります。聞き手が慣れていないとむずかしいです。また、テープをおこすと、よみ手も自分自身のよみを聞いて話し合いに参加できます。

③本人の感想——司会者はテープを止めて、「では、○○さん、ご自分のよみをきいての感想をどうぞ」といいます。よみ手は自分のよみについての感想をのべます。発声・発音の基本的なことから文章の内容の理解まで、どんなことでも気のついたことをいいます。はじめのうちは、よみまちがいや発音やアクセントばかり気になります。しだいに内容とよみとの関連に耳が向くようになります。「文章がこう書かれているので、こういう気持でよみました」と

いう発言ができるようになります。ですから、感想も自分のよみの発達段階に応じた意見が述べられればよいのです。

④聞き手の感想——司会者が「では、前によんだ○○さん、ご意見・感想をおねがいします」といって、一つ前のよみ手が感想をのべます。他人のよみを注意深く聞いて感想や意見をいうことは「耳を肥やす」ことになります。もし聞き手に「わたしならばこうよむ」という意見があれば、そのよみ方をしてもらってもよいでしょう。

⑤話し合い——参加者から気をついた点について意見を出してもらって話し合います。講師はよみ手の発達段階を意識して、その人の前回のよみと比較します。他の人のよみと比べるのではなく、その人自身のよみの発展を見るのです。ここでも中心となるのは、よみのうまいへたの問題ではなく、文章の内容をどう理解してよもうとしたかです。

そのあとで、よみ手は助言を参考にして同じ部分をもう一度よみ直してみます。すると、必ずはじめの録音よりうまくよめます。聞いたばかりの助言を忘れないうちに生かしてよみ直すので、その場で上達します。それでも不十分なきには、さらに助言してもらい、もう一度よみ直します。この時間がたくさんとれると上達ははやくなります。

(3) 練習方法のヴァリエーション

以上のようなグループ学習をおこなう方法をいくつかあげておきます。これらは個人練習にも応用のきくものですから、みなさんが工夫してください。

① **口うつし法**……講師と受講生が四、五人くらいまでの少人数の場合に利用できます。むかしの寺小屋の授業のような方法です。講師のよみを受講生がマネるのです。講師がテキストの二、三節を読んだあと受講生がつづいてよみます。講師のすぐあとによむので、アクセントやイントネーションなど忘れないうちに発声できます。

この方法は、ごく初歩の人のクセ直しやアクセントの矯正に向いています。初歩の人には決まって独特のよみグセがあります。それは講師のよみをマネることで簡単にとれます。ただし、レベルの上がった人がいつまでもこれをするのはよくありません。表現よみはマネではなく、あくまで自己の理解と表現を目的とするからです。しかし、基本のよみ方に立ち返るときや、アクセントの確認のためには有効な方法です。講師がいない場合には、お互いに交替でリーダーをやるのもよいでしょう。しだいに単なるマネではなく、独自のよみ方のくふうも生まれてきます。

② **テーププロ移し法**……講師のいない場合に、あらかじめ講師の録音した表現よみのテープを一節ずつたどってよむ方法もあります。これは個人練習にも応用できる方法です。市販の朗読のカセットテープを買ってきてマネれば、ある程度のよみを身につけられますが、よいよみ手が少ないのであまりおすすめしません。

この方法も、よみ手が初心者でよみのクセがある場合に有効です。しかし、上達したときには、よみ手をしばります。テープのよみ手をマネることから、いつかはなれなければなりません。

③ **リレーよみ**——作品を少しずつ、次つぎにリレーしてよんでいく方法です。短い作品の全体を味わえるので、くりかえしよむと、自分と同じ部分を人がよんだときのよみが批評的に聞けます。同じ部分を別の人がくりかえしてかまいません。何人かのよみ方をつづけて聞いていると、同じ文でもいかに多様なよみ方があるか分かります。

(4) 記号づけ確認法

グループ学習である程度の上みはできますが、もう一步の上達をしたいというときの研究的な方法です。ただし、この方法で学習するには、すべての参加者にある程度の上みのレベルが要求されます。

学習の進行過程は次のようになります。

① **テキスト分担**……あらかじめテキストの部分ごとに担当者を決めます。記号づけをしたものを人数分コピーして持参します。ひとりの担当は長くしないで、四、五行に限る方が内容を深く考えられます。

②記号づけの発表……例会の当日は、まず担当者が記号のつけ方について説明します。例えば、なぜそこに区切りをつけたか、その根拠や疑問点・問題点の提起をします。それから、担当者は説明した記号づけにしたがって、その部分を自分でよんでみます。

③意見・感想・話し合い……そのあと、ほかの人たちから、そのよみについての意見や感想を出してもらいます。もし意見のちがいがあれば、その点を検討します。ほかの人たちも、検討する部分を実際によみながら意見を述べるようにします。

④記号の検討……よみの検討をするときに大切なのは記号づけとの関連です。記号にしたがってよまれたよみを内容と関連させて検討して記号にして定着させるのです。

検討のポイントはよみ方から内容の理解まで無限にあります。発見したことよりも、これから発見することの方が多くくらいです。会話については第〇章に紹介したチェックポイント、文章構成については第七章・第八章で述べましたので、それを参考にしてください。

5 発表会と交流の楽しみ

せっかくグループで学習するのですから、一人ではできない楽しみをもちたいものです。どんな勉強でも目標があると、いっそうはやく上達するものです。その一つの方法は、グループの仲間たちばかりでなく、外部の人々にも聞いてもらえる会をもつことです。

日本コトバの会では、毎年、春と秋に二回の表現よみ発表会を開いています。今まで通算して五〇回近くで、とりあげた作品も二〇〇以上になります。また、コトバの会の支部には、毎年一回ずつ発表会を開催している支部もいくつかあります。

発表会に一度、出演すると、毎月一度の練習を続けているのはちがった急速な進歩があります。発表する作品を集中してよむことによって、それまでとは質のちがった勉強ができるからです。また、一人一人が真剣になるので、グループ全体の雰囲気も変わってきます。そして、発表会が終了するとグループのよみの水準も一段階上がります。

会の発表会は一〇〇人ほどの会場で開催していますが、はじめは大きな会場でなく、グループの活動する公共の施設などの二、三〇人の室からはじめるのがよいでしょう。また、日ごろ借りている施設の文化祭なども発表のよいチャンスです。あるいは、地元の小さな喫茶店などを借り切って少人数で開催するのも楽しいものです。少しのアルコールや簡単な食事をとりながらよみを聞くのもムードがあります。

表現よみを聞くことは緊張のいることなので、プログラムには工夫が必要です。まず、聞く価値のある作品を選ぶことです。すぐれた作品は、どの部分をとっても聞く人をひきつける魅力があります。

短いだけのこまぎれの短い作品をいくつも並べるより、長くても優れた作品の部分をやむ方がよいのです。また、発表作品の全体に統一性をもたせる必要もあります。たとえば、作品の

テーマでの統一性をもたせたり、一人の作家の作品で統一するなどの方法があります。

また、表現よみばかり二時間もつづけるのは、聞き手にはたいへんな努力を強いるものです。途中に休憩を入れるのはもちろんですが、詩の朗読をとり入れたり、よみの背景に音楽を流すのもよいでしょう。また、歌や合唱や楽器の演奏を入れるのも楽しいです。さらに、表現よみについて質疑応答の時間を入れるのも新しい人に関心をもってもらうきっかけになります。

以上のように、発表についていろいろな企画が考えられます。他のグループや団体の協力が得られると発表会も楽しくなりますから、共同主催の会にするのもよいでしょう。

表現よみといっても、ただ舞台でまじめによむばかりではありません。学習の会にはちがひありませんが、みんなで楽しむために、さまざまなよみ方の演出の工夫があつてよいのです。舞台におけるよみ手の配置を工夫して発表会を開催してみたり、山本安英の「ことばの勉強会」のように、同じ部分を同時に複数の人たちによむ「群読」という方法もあります。また、作品構成をして同じ作家の作品をジャンルごとによみ手が分担してよむこともできます。

わたしは梶井基次郎の作品と手紙を舞台用に構成したことがあります。代表的な小説をいくつかとりあげて、その間をナレーションと手紙でつなぎました。ナレーションには社会的な背景や伝記的なことを語らせ、手紙では作者の思想的な変化を表現するようにしました。

表現よみの発表については、まだまだいろいろなくふうができます。みなさんも、一人でよむだけでなく、発表会の楽しさを味わってください。わたしも表現よみの勉強を楽しみながら

研究をしてゆくつもりです。

(渡辺知明著『表現よみとは何か―朗読で楽しむ文学の世界』1996明治図書)